

平成30年度（第62回）  
岩手県教育研究発表会発表資料

道徳分科会

「小学校道徳科」における評価方法の研究  
ーパフォーマンス課題・評価を手がかりにー

平成31年2月7日  
岩手大学大学院教育学研究科  
授業力開発プログラム  
濱 田 成 樹

## 1. 問題意識および研究目的

我が国の道徳教育は、「道徳の時間」を要として学校や児童生徒の実態に合わせて内容が充実され、一定の成果は上げてきた。しかし、その一方で、指導が不十分で読み物資料の登場人物の心情理解に終始した道徳の授業になってしまうという課題も指摘されてきた。

このような状況の中、さらなる指導の充実を図るために道徳教育を教科化する主張が強まってきた。2014年10月には、中央教育審議会より「道徳に係る教育課程の改善等について」の答申が出された。この答申では、道徳の時間を「特別の教科 道徳」として位置づけることや、多様な効果的な指導へ改善すること、一人一人のよさを伸ばし、成長を促すための評価を充実させることなど改善の方向性が示された。

この答申を踏まえ、2015年3月には、「小学校学習指導要領」、「中学校学習指導要領」の一部が改正され、小学校道徳科の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と設定された。道徳科の指導については、読み物資料の登場人物の心情理解に終始したこれまでの道徳授業からの脱却を目指し、答えが一つではない道徳的な課題を一人ひとりの児童生徒が自分自身の問題と捉え向き合う、「考え、議論する」道徳への転換が図られることになった。この「考え、議論する道徳」について、赤堀博行は、ねらいとする道徳的価値について自分事として考える中で自分の考え方を明らかにし、加えて、ある問題について互いの考えを述べ合うことにより多様な考え方に合点して自分の考えを深めていくことであると、述べている(赤堀, 2017)。このように授業を変革するためには、児童生徒に自己の成長や課題と対峙させ、自分の考えを深め構築していく活動も必要となる。そのための手立てとして期待されるのが、道徳の教科化によって導入されることになった「評価」である。

道徳科の評価については、「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」において、「児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし数値などによる評価は行わないものとする」と述べられ、そのあり方が示されている。これは、道徳科において、教師が児童の学習状況や成長の様子を様々な方法で把握し、教師自身の指導を評価することで、指導方法などの改善に努めることである。

では、道徳科の評価をどのような方法で具体化するのか。道徳科の評価方法については、様々な模索されている段階である。そこで、本研究では、「評価」という視点から小学校の道徳科の授業を見直すことを試みる。小学校の道徳科における評価方法について様々な教育評価理論や方法を参照しながら具体化し、これらをもとに、道徳科の授業を立案し、その実践研究を通して小学校の道徳科の有効な評価方法の構築を目指す。

## 2. 先行研究の整理および研究主題の設定

### (1) 小学校道徳科の学習活動

小学校道徳科の学習活動は、「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」において、以下のように位置づけられ、説明されている。

#### ①道徳的諸価値について理解する

一つは、内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解することである。二つは、道徳的価値は大切であっても中々実現することができない人間の弱さなども理解することである。三つは、道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考えた方は一つではない、多様であるということをも前提として理解することである。

#### ②自己を見つめる

自分との関わり、つまりこれまでの自分の経験やその時の感じ方、考え方と照らし合わせながら、更に考えを深めることである。

#### ③物事を多面的・多角的に考える

児童が多様な感じ方や考え方に接することが大切であり、児童が多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えることが求められる。

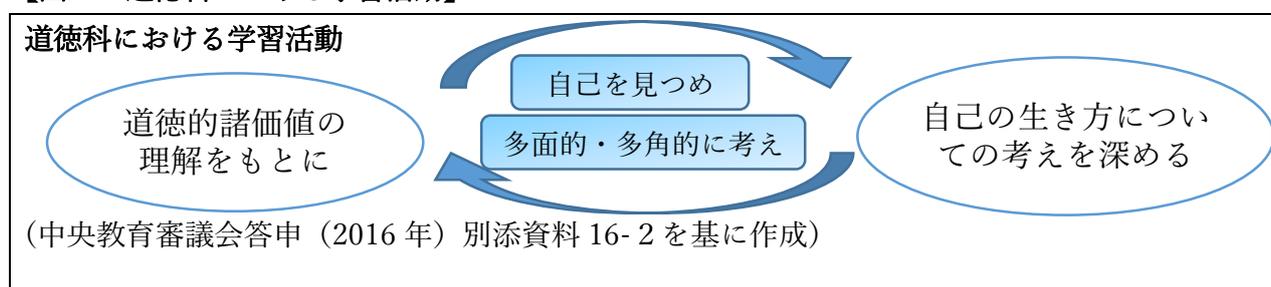
この多面的と多角的という言葉は、ひとくくりにして捉えられているため区別することは難しいが、次のような指摘がある。平成29年度大分県道徳教育指導資料によると、「多面的とは、道徳的価値のもつ様々な意義、大切さ、難しさ、多様さという様々な側面から考えること」「多角的とは、中心となる道徳的価値と、他の道徳的価値を関連させて考えること」と、捉えている。

#### ④自己の生き方についての考えを深める

児童が道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることを通して形成された道徳的価値観を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことである。その際、道徳的価値の理解を自分との関わりで深めたり、自分自身の体験やそれに伴う感じ方や考え方を確かに想起したりすることなどを意識して指導することが重要である。

上記4つの内容を照らし合わせると、重なる内容もあり、【図1】のようにそれぞれが関わり合いながら学習を深めていくことが大切である。

#### 【図1 道徳科における学習活動】



## (2) 小学校道徳科の評価の基本的態度

ところで、小学校道徳科については、どのような視点からの評価が求められるのであろうか。

児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わない。

(小学校学習指導要領「第3章 特別の教科 道徳」の「第3 指導計画の作成と取り扱い」の4)

上記より、小学校道徳科では、道徳性を評価していくのではなく、「児童の学習状況」と「道徳性に係る成長の様子」を把握し、評価していくことが必要であるとされている。

### ①「学習状況」の把握について

永田繁雄は、「学習の成果物」をもとに評価するのではなく、「学習活動の様子」を評価すべきであると指摘する。道徳性そのものは評価できないが、道徳性を養う学習活動にどのように取り組んでいるか、その学びの姿をとらえることは可能である(永田, 2017)。あるいは、赤堀博行は、「道徳科の学習」とは、「道徳的価値の理解」「自己を見つめる」「物事を多面的・多角的に考える」「自己の生き方についての考えを深める」ということであるから、「学習状況」の把握とは、子どもたちのこれらの学習の有様を把握することが求められるということであると、述べている(赤堀, 2017)。

つまり、道徳科における「学習状況」の把握とは、4つの学習内容について、児童の学習活動の様子を把握することだと捉えることができる。

### ②「道徳性に係る成長の様子」の把握について

赤堀博行は、「道徳性に係る」とは、目標に示されている「道徳的価値の理解」「自己を見つめる」「物事を多面的・多角的に考える」「自己の生き方についての考えを深める」であると言う。したがって、「道徳性に係る成長の様子」とは、道徳科の学習を積み上げることで、これらの学びがいかに成長したかであると述べている(赤堀, 2017)。

つまり、道徳科における「道徳性に係る成長の様子」の把握とは、4つの学習内容についての授業を積み重ねる中で、これらの成長の様子を把握していくことだと捉えることができる。

### ③評価の視点について

道徳科では、先に述べた4つの学習内容に視点を置き、評価していくことが必要であると捉えることができる。しかし、これら4つの学習内容については、区別して把握していくことは難しい。【図1】にあるように「道徳的価値の理解を図り」ながら「多面的・多角的に考えている」ような場合もあるからだ。では、これらの学習をどのような視点で把握していくのか。「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」では、これら4つの学習内容を反映させた以下の2点を重視しながら評価していくことが重要であると指摘している。

視点1 「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか」

視点2 「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」

(小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編「第5章 道徳科の評価」の第2節 pp.110-112)

この2つの視点については、さらに細かく7つに分類されている。本研究でも、この分類を参考にしながら着目する児童の姿をイメージし【表1】のように評価の視点を定めた。

【表1 本研究における道徳科の評価の視点】

本研究における道徳科の評価の視点と着目する姿

視点1 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか

①道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている。

(着目する姿) 立場や状況など様々な視点から、判断の根拠や心情を捉え考えている。

②自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。

(着目する姿) 友達の考えを、自分の考えと比べながら考えている。

③複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を、多面的・多角的に考えている。

(着目する姿) 複数の価値を関連付けて考えたり、他の価値に広がりをもたせたりして考えている。

視点2 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか

①読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。

(着目する姿) 教材の登場人物に自分を置き換えて考えている。

②現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している。

(着目する姿) ・学んだことと自分の経験をつなげ、これまでの自分の行動や考えを見直している。  
・学んだことや自分の経験を基に、これからの生き方について考えている。

③道徳的な問題に対して自己の取りうる行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解をさらに深めているか。

(着目する姿) 友達と話し合ったり、考えを聞いたりしながら価値理解を深めている。

④道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしているか。

(着目する姿) 中々実現できない難しさや人間のもつ弱さを、自分ごととして捉え考えている。

(3) 道徳科における評価方法について

道徳科については、どのような評価方法が考えられるであろうか。2014年10月の中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」では、道徳科の評価方法について、次のように記されている。

道徳性の評価に当たっては、例えば、指導のねらいに即した観点による評価、学習活動における表現や態度などの観察による評価（「パフォーマンス評価」）など、学習の過程や成果などの記録の積み上げによる評価のほか、児童生徒の自己評価など多種多様な方法の中から適切な方法を用いて評価を行い、課題を明確にして指導の充実を図ることが望まれる。

出典：中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」（2014年10月）p.16

このように、道徳科の評価が導入されるに当たり注目されているのが、各教科でもこれまで行われてきたパフォーマンス評価である。これらを道徳科に合わせて取り入れることが期待されていると指摘しているのである。

## ①パフォーマンス課題と評価について

### 「パフォーマンス評価」

知識やスキルを使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求めるような問題や課題への取り組みを通して評価する評価方法の総称である。狭義には、実際に生活や社会で直面するようになりアルな文脈に即して、問題場面を設定してその思考過程を評価する。

### 「パフォーマンス課題」

様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題である。パフォーマンス課題には、論説文やレポート、展示物といった完成作品や、スピーチやプレゼンテーション、実験の実施といった実演を評価するものなどが含まれる。（西岡・石井・田中，2015）

## ②道徳科で考えると

パフォーマンス課題は、単元で学んだ要素を総合して考えたり、同じ課題に繰り返し取り組んでレベルアップを図ったり、といった形で取り組むように位置づけられることが多い。本研究では、この「学んだ要素を総合して考える」というところに注目した。【表1】に示した2つの評価の視点を見取るためには、これらの視点を支える道徳科の学習活動（「道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることを通して、自己の生き方についての考えを深める」）を具現化していかなければならない。自己の生き方についての考えを深めるには、自分の考えを構築する活動を授業の中に位置づけていくことが必要だと考える。その位置づけとして、パフォーマンス課題・評価を用いることが有効ではないかと考えた。これまでの道徳の授業は、1時間で完結されることが多く、授業と授業をつなげたり、まとまりで捉えたりすることが少なかった。1時間1時間の授業をつなげ、まとめて考えるような授業を設定することで、児童はさらに自分の考えを深めていけるのではないかと考えた。そこで、道徳科においても、学習を振り返るまとめの授業を行い、これまでの価値理解を総合して考えるようなパフォーマンス課題を設定する。児童は、課題に取り組むことで、自分の考えを見つめ直していく。それによって、自分の考えを構築し、自己の生き方への考えを深めることにつながると考えた。この考えをまとめの授業だけではなく、1単位時間の授業にも生かし、授業の改善を図っていく。このような学習活動を充実させることは、評価の視点で見取ることにもつながっていくと考え、本主題を設定した。

### 3 道徳科における評価の構想

#### (1) パフォーマンス評価の位置づけ

2つの視点から評価を行うには、一人ひとりの学びの姿が見えるようにする活動が必要である。そして、その活動は、教師の評価のためだけにあるのではなく、児童にとって自己と対峙させ、自己の生き方への考えを深め、構築していくような学びにつなげなければならない。本研究では以下のようにパフォーマンス課題・評価を位置づけた。

##### ①長期のパフォーマンス課題・評価

本研究では「B 主として人との関わりに関すること」の学習を一つのまとまりとして捉え、まとまりを構成するいくつかの授業を振り返るまとめの授業を行う。その授業では、「自分はどのような関わりを大切に生きていきたいか」という視点からパフォーマンス課題を設定する。この課題に取り組むためには、「思いやり」や「感謝」、「礼儀」などに対する自分の道徳的価値の理解を見つめ直したり、整理したりしながら、総合して考えることが必要になってくる。児童は、その過程を経て、人との関わりについての考えを構築していく。これが長期のパフォーマンス課題の考え方である。

教師は、児童の課題へのパフォーマンスに目を向けていく。児童の課題へのパフォーマンスからは、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」、「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」という学びの姿が表出されると考えられる。そのような姿に着目し把握していく。さらに、これまでの学習過程にも目を向けることで、学習全体を通した道徳性に係る成長の様子を評価することにもつなげていく。これが本研究の長期のパフォーマンス評価の考え方である。

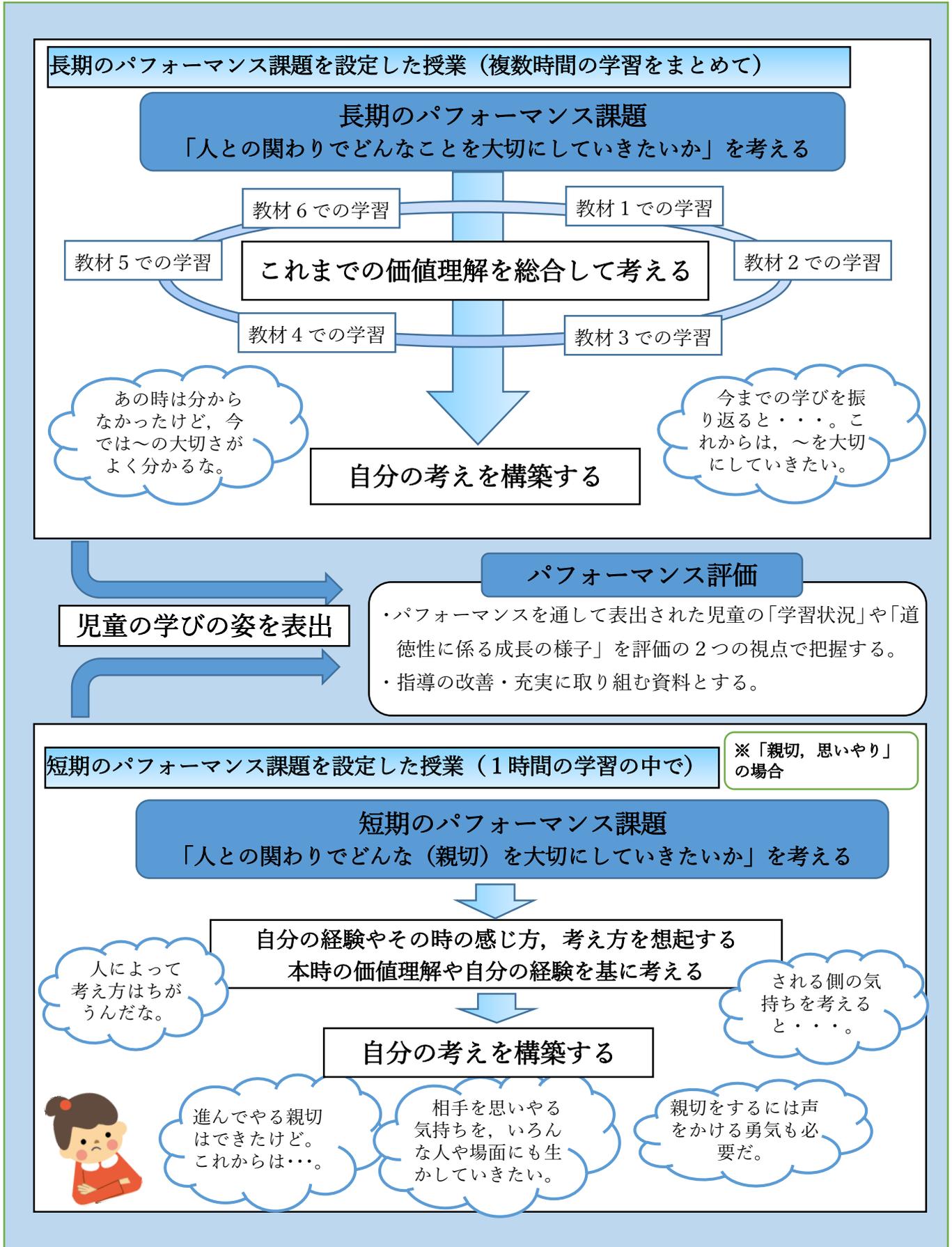
##### ②短期のパフォーマンス課題・評価

その一方で、1時間ごとの児童の「学習状況」も適切に把握していかなければならない。1時間の授業内であっても、これまでの学習や自分自身を振り返る活動は必要である。1時間1時間の様子を把握することは、児童の成長を把握することにもつながっていく。

長期のパフォーマンス課題は複数時間の学びを総合して取り組むのに対して、短期のパフォーマンス課題は1単位時間の中で取り組む。授業の後半に、本時の授業で学んだことを基にして、これまでの自分の経験とつなげたり、本時の学びを見つめ直したりしていく活動を位置づける。例えば、親切についての学習の場合、教材について学んだ後に、親切が必要になるような架空の状況設定をしたパフォーマンス課題に取り組む（本資料 p.9②パフォーマンス課題の設定参照）。現実的な状況の中で設定された課題に向き合うことで、児童が自分の経験を想起することができるようにする。その中で、本時での価値理解や自分の経験を基にして、自分の考えを構築することができるようにする。これが、短期のパフォーマンス課題の考え方である。

教師は、課題に対する児童のパフォーマンスに目を向けていく。児童のパフォーマンスには、学んだ親切についての理解を基に、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」という学びの姿が表出されると考えられる。そのような姿に着目し把握していく。これが、本研究の短期のパフォーマンス評価の考え方である。

③本研究の構想図（パフォーマンス課題・評価のイメージ）



## 4 実践計画

①実践校 盛岡市内小学校

②対象学年 4年生2学級

③実践期間 平成30年6月～平成30年11月

④研究計画（網掛けの部分を実践授業）

本研究では、実践協力校の年間指導計画や重点目標に沿って、パフォーマンス課題を設定し、道徳科の授業を立案した。実践協力校では、学校教育目標に即して、5月から11月にかけて「B主として人との関わりに関すること」の内容項目を重点的に配列している。そこで、本研究では、「B主として人との関わりに関すること」の項目をひとまとまりとして捉え、実践研究を進めることにした。授業計画は【表2】の通りである。網掛けの部分は、本研究で実践授業を行った時間である。本実践研究以外の、担任が行う授業も可能な限り参観し、児童の状況把握に努めた。

【表2 本研究の研究計画とパフォーマンス評価の位置づけ】

	教材	学習内容
4月	思いがけないあいさつ	心を込めて接することで、互いが気持ちよくなることに気付き、進んで礼儀正しい行いをしようとする心情を育てる。
5月	泣いた赤鬼	相手を深く思うことについて多面的・多角的に考え、自分が目指す友情観を見出すことで、友情について道徳的実践意欲を高める。
6月	心と心のあく手	<b>実践1 短期のパフォーマンス評価</b> 相手の立場や状況に応じた親切を考えていこうとする心情を育てる。
9月	温かい言葉	相手の気持ちを考えることの大切さについて自覚を深め、進んで親切にしようとする心情を育てる。
9月	いのりの手	友達を互いに理解し合い、信頼して助け合う気持ちを育て、どのような状況におかれても、友情を貫こうとする態度を養う。
10月	へらぶなつり	<b>実践2 短期のパフォーマンス評価</b> 広い心で、自分と異なる人の立場を受け入れようとする判断力を育てる。
11月	振り返りの授業	<b>実践3 長期のパフォーマンス評価</b> これまでの「人との関わりに関する道徳科の学習」を総合して考えるまとめの授業と位置づける。これまでの関連する授業の板書の写真やワークシートを配り、下記のようなパフォーマンス課題を与え、人との関わりに関する自分の考えを構築できるようにする。

## 5 道徳科での授業実践

### （1）実践1 短期のパフォーマンス評価その1

#### ①本時の構想

短期のパフォーマンス評価の構想が生まれたのは、実践協力校の教員から授業後に頂いた助言がきっかけであった。児童が事後に記述した感想を読んでいくと、表面的な価値理解に終わっている児童が多数見られた。そこで、その教員に相談すると、「自分の経験を想起できていないことが原因だから、具体的場面を提示して考えを広げられるようにすることが必要だ。」と助言を頂い

た。この「具体的場面を提示して考える」ということは、「現実的な状況や文脈で考える」パフォーマンス評価の考えと共通する部分があると考えた。その助言をきっかけに構想したのが「短期のパフォーマンス評価」である。1時間の授業内でも、児童の身近に溢れている親切について考えるようなパフォーマンス課題に取り組むことで、自分の経験を想起し、考えを深めることができるのではないかと考えたからだ。

<p>主題名：心と心のつながり【親切，思いやり】          教材名：心と心のあく手（みんなの道徳 小学校4年）          ねらい：相手の思いや状況に応じた親切を考えていこうとする心情を育てる。          主な学習活動</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 周りの人たちのためにどんな親切な行いをしてきたかを問う。</li> <li>2 教材「心と心のあく手」を読んで感想を発表し、話し合いの方向をつかむ。</li> <li>3 主人公「ぼく」の気持ちや行動を捉え、自分の考えを模索していく。</li> <li>4 把握した価値と自己との関わりを考える。  <u>パフォーマンス課題を提示し、みんなで話し合う。</u>            書く活動を取り、自己との関わりを考える。</li> <li>5 教師の話聞く。</li> </ol>
--

## ②パフォーマンス課題の設定

パフォーマンス課題を用いた評価では、学んだことを発揮できるようリアルな文脈を与え、ある振る舞いを行わせ、それをもとに評価を行うために、架空の状況設定が行われることがある。西岡加名恵は、パフォーマンス課題をつくるための「6つの要素」を利用した方法を提案している。西岡は、下記のように、(1)「パフォーマンスの目的」、(2)「学習者の役割」、(3)「パフォーマンスの相手」、(4)「想定されている状況」、(5)「生み出すべき作品」、(6)「評価の観点」を織り込んで課題を作成することで、目的が明確化されてくると指摘している（西岡・石井・田中, 2015）。本時の授業では、6つの要素を参考にして以下のようにパフォーマンス課題を考えた。本時のパフォーマンス課題は、現実的な状況や文脈で考えられるように、学校生活の一部である休み時間の出来事を設定した。

要素	内容
目的 (Goal)	親切が行えるような場面を設定し、学んだ親切についてリアルな文脈で考えられるようにする。
役割 (Role)	上級生として2年生の女の子との関わり
相手 (Audience)	2年生の女の子
状況 (Situation)	休み時間の出来事を設定する。休み時間に校庭に出ると、2年生の女の子が一人で逆上がりの練習をしている。女の子は何度もチャレンジしているが中々できない。
完成作品／実演 (Performance)	発言による発表
評価の視点 (Standards)	評価の2つの視点

### 本時のパフォーマンス課題

あなたが、運動時間（休み時間）になり、遊ぶために校庭に出ました。鉄棒がある場所に行くと、2年生の女の子が、一人で逆上がりに挑戦しています。何度も練習していますが、中々できるようになりません。

①この女の子は、どんな気持ちでいると思いますか。

（まず、どんな気持ちでいるかを想像させる）

②あなたなら、この子にどのように関わりますか。

### ③パフォーマンス課題の実際

教材についての話をを行った後に、短期のパフォーマンス課題を提示した。まずは、気持ちを想像させ、自分だったらどのように関わるかを聞いていった。

（授業記録）

T みなさんに考えてほしいことがあるんです。※パフォーマンス課題を提示する。

A 児 わたしは、お兄さんやお姉さんに教えてもらえないかなって考えていると思う。

B 児 どうやったらできるようになるのかな？

C 児 みんなできているのに、何で自分はできないんだろう。悔しいなという気持ちだったと思います。

T では、みなさんなら、この子にどのように関わるかを発表しましょう。

D 児 その女の子に、逆上がりのお手本を見せて教えてあげたい。

E 児 ぼくは、逆上がりができないから、関わることはできないかもしれません。でも、お手本を見たらきっとできるようになるよってアドバイスしてあげたい。

F 児 2人と違って、今日のぼくのように横でそっと見ていた方がいいと思う。その子は、もしかしたら自分の力でできるようになりたいと思っているから、その方がいい。

G 児 ぼくも、Fさんと同じで見守ると思います。でも、自分の力でできるように、アドバイスをしてあげるかも。

H 児 私は、これまでその人のことを考えた親切ができていなかったのだから、まずは、その人をそっと見守って、必要だったらちょっと手伝ってあげたりしたいと思います。

### ④短期のパフォーマンス課題からの「学習状況の把握」

パフォーマンス課題に対する「発言での発表」から、2つの視点「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」に沿って以下の【表3】のように児童の学習状況を把握した。

【表3 実践1のパフォーマンス評価】

	パフォーマンス課題に対する発言	学習状況の把握
E 児	ぼくは、 <u>逆上がりができないから、関わることはできないかもしれません。</u> (しばらく考える) でも、 <u>お手本を見たらきっとできるようになるよってアドバイスしてあげたい。</u>	→ <b>視点2-④</b> 道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え考えようとしている ・分かっているけど実行することの難しさを捉えている。自分なりにできる親切を考えて、実行しようと考えている。
F 児	<u>2人と違って、今日のぼく(主人公)のように横でそっと見ていた方がいいと思う。その子は、もしかしたら自分の力でできるようになりた</u>	→ <b>視点1-①</b> 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている ・教材で学んだ「相手に応じた親切」と、友達の考え

	いと思っているから、その方がいい。	「自分から進んで行く親切」を比較して発言している。様々な視点からの学びを基にし、「もしかしたら・・・」と、その女の子の心情を捉えようとしている。
G 児	(前に発言した3人の児童の話を聞きながら聞いている。) ぼくも、Fさんと同じで見守ると思っています。でも、 <u>自分の力でできるように</u> 、アドバイスをしてあげるかも。	→ <b>視点1-②</b> 自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている ・前に発言した3人の児童(前者2人は違う考え)の発言を聞きながら聞き、理解を示している。その上で、自分の考えを発表した。自分の気持ちよりも、相手のことを考えた親切をしようと考えている。
H 児	私は、 <u>これまでその人のことを考えた親切ができていなかった</u> ので、まずは、 <u>その人をそっと見守って、必要だったらちょっと手伝ってあげたりしたい</u> と思います。	→ <b>視点2-②</b> 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している ・これまでの自分の行ってきた親切を振り返りながら考えている。 → <b>視点1-①</b> 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている ・「見守る親切」を行ったり、「進んで手伝う親切」を行ったりと、相手の状況を捉え様々な視点から考えようとしている。

## ⑤実践1の考察

### a. 評価の視点からの考察

本時の学びが、パフォーマンス課題に対する発言にどのように表れているのかを考察した。E児は、実行することの難しさも考えながら、発言している。これは、逆上がりができない自分と対峙しながら、自分のこととして問題を捉えていることが分かる。F児は、「今日のぼく(主人公)のように」と前置きしながら発言している。教材を通しての価値理解を基にしながら、自分でしっかりと判断して行動しようと考えている。G児は、前の3人の考えを受けながら発言している。学び取った様々な親切の仕方を比較しながら、自分なりに大切にしたい親切を見出している。H児は、「これまでその人のことを考えた親切ができていなかった」と、前置きしながら発言している。本時で学んだ親切が実生活ではできていなかったことを理由としながら、自分で状況判断して行動することが必要だと考えている。学んだ親切を基に自己を見つめ、考えを深めていることが分かる。

このように、パフォーマンス課題に取り組むことによって、2つの評価の視点から把握することが可能となる。

### b. 授業の視点からの考察

2学級で同じ教材を使用し、一方ではパフォーマンス課題を設定しない内容、他方ではパフォーマンス課題を設定する内容で授業を行った。この2つの授業を比較することで、パフォーマンス課題が、児童にどのような学びを生み出したのかを考察した。その考察に用いたのが、児童が記述したワークシートである。どちらの学級の児童も「どんな親切を大切にしたいと考えているか」(同じ設問)について事前と事後に記述をした。その事前と事後で記述内容にどのような変容が見られたかを調べていった。パフォーマンス課題を設定した場合は、33人中17人の児童に

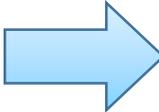
以下の視点について変容が見られた。

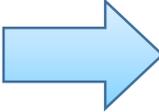
パフォーマンス課題を設定した場合に見られた記述の変容

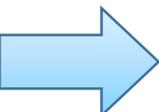
- ・本時の学びと自分の経験をつなげたり、比較したりして、人との関わり方（大切にしたい親切）を見つめ直している。

パフォーマンス課題を設定した授業での児童の記述を探っていくと、「本時の学び」と「自分の経験」をつなげたり、比べたりしながら、人との関わりを見つめ直している児童が多数見られるようになった。これは、パフォーマンス課題を設定しない授業では見られなかった変容である。そのような児童の一例を示したものが【表4】である。

**【表4 パフォーマンス課題を設定した授業で見られた児童の変容】**

	事前の記述		事後の記述
C 児	・私は、友達が物を落としたりして困っている時には、拾ってあげるような親切を大切にしていきたいと思います。		・私は、今日の主人公が行った見守る親切も大事だけど、「大丈夫？」と、声をかけるような親切も大切にしていきたいです。なぜなら、今まで自分は知らない人には、どきどきして声をかけることができなかったから。
C児は、教材の主人公が行った「相手に応じた親切」と、自分ができなかった「自分から進んで声をかける親切」を比較して考えている。一方の親切に理解を示しながら、違った視点で自分が大切にしたい親切を見出している。			

	事前の記述		事後の記述
G 児	・バスなどに乗っていて、お年寄りの方が乗ってきたときには、進んで席をゆずっていききたい。「ありがとう」と言われると嬉しい気持ちになるから。		・声をかけたり、手伝ったりする親切の他に、相手のことを考えて、対応を変えてたくさんの親切をしていきたい。なぜなら、人によって思っていることは違うから。
G児は、授業前は「進んで行う親切」を大切にしたいと考えていたが、授業後は「相手に応じた親切」を大切にしたいと考えている。その理由として「人によって思っていることは違うから」としている。この児童は、【表3】に示したように、しっかりと耳を傾けながら友達の話聞いていた。多様な考えに触れることで、自分が大切にしたい親切を見つめ直している。			

	事前の記述		事後の記述
I 児	・私は、けがをしたり、困っている人を助けたりするような親切を大切にしていきたいです。		・私は、前に重そうな荷物を持っている人に声をかけて断られたことがあります。次の日から声をかけないようにしてしまいました。だから、自分ができないか考える親切を大切にしていきたいです。
I児は、自分でできる親切をしていきたいと考えている。その根拠となっているのが、断られてから声をかけることをやめてしまったという経験である。本時の学びと自分の経験をつなげながら、大切にしたい親切を考え直している。			

児童は、現実的な状況や文脈で考えるようなパフォーマンス課題に取り組むことにより、自分の経験を想起し、教材の学びと自分の経験をつながながら、自分の考えを構築することができたと考えられる。その一方、パフォーマンス課題を授業後半になって提示して、取り組んだため、自分の考えがまとまらないまま授業を終えた児童もいたと考えられる。導入部分で、パフォーマンス課題を提示することで、児童自身が1時間の授業を見通して、じっくりと自分の考えを構築していけるようにすることも必要だと考えた。

## (2) 実践2 短期のパフォーマンス評価その2

### ①本時の構想

実践1の反省点を踏まえ、授業の構想をした。改善点は、パフォーマンス課題を導入場面で提示することで、児童が見通しをもって学び、自分の考えを一時間の中で構築できるようにしたことである。

主題名：ゆるす心の広さ【寛容，相互理解】

教材名：へらぶなつり（みんなの道徳 小学校4年）

ねらい：広い心で自分と異なる人の立場を受け入れようとする判断力を育てる。

主な学習活動

- 1 価値に関わる場면을提示し、教材への導入を図る。

**パフォーマンス課題を提示し、問題を把握する。・・・場面1**

- 2 教材「へらぶなつり」を読んで感想を発表し、話し合いの方向をつかむ。
- 3 「明」の気持ちや行動を中心に捉え、自分の考えを模索していく。
- 4 把握した価値と自己との関わりを考える。

**再度パフォーマンス課題を提示し、みんなで話し合う。・・・場面2**

書く活動を行い、これまでの自分を見つめる。

- 5 教師の話聞く。

### ②パフォーマンス課題の設定

本時のパフォーマンス課題は、現実的な状況や文脈で考えられるように、学校生活の一部である給食時間の出来事を設定した。

#### パフォーマンス課題

今日、あなたはお気に入りの服を着て学校に来ました。給食時間になり、あなたはとなりの友達と話をしながら、準備が終わるのを待っていました。近くでは、当番の児童が急いで給食を運んでいます。今日は代表委員会があるからです。その当番のお友達が、あなたの机にぶつかりました。すると、あなたの机の上にあった給食がこぼれ、服が汚れてしまいました。

①あなたは、どんな気持ちになりますか。

②どんな言葉をかけますか。または、どんな行動を取りますか。

### ③パフォーマンス課題の実際

上部分が場面1での提示、下部分が場面2での提示である。上部分のK児と、下部分のK児は同じ児童である。

(授業記録) 導入場面での提示(場面1)

T パフォーマンス課題提示

C1 ああ、あるある。

C2 本当にお気に入りの服を着て来て、そうなった時があった。

C3 その急いでいたお友達に気を付けてって言う気持ちもあるけど、しょうがないって気持ちもある。

C4 委員会があつて遅れるとしょうがないけど、お気に入りの服が汚されて嫌だな。気を付けて運んでって言います。

K 児 まず、給食は大丈夫かなと考えます。その後に、服が汚れてしまったなあ。がっかりします。

T こんな時、どうしたらいいんでしょうね。今日、みんなで読んでいく教科書のお話にも、同じような問題が出てきます。教科書を通して、この問題についても考えていきましょう。

(授業記録) 展開後段場面での再提示 (場面2)

T パフォーマンス課題再提示

J 児 こぼした相手は、たぶん、申し訳ないなって気持ちだと思います。自分は、大事な服じゃなくても、やっぱり嫌な気持ちになったし。でも、(相手は)間違つて不安でいっぱいだし、自分のことをすごく責めたと思います。だから、大丈夫って声をかけます。

K 児 その当番の人は、こぼしてしまって、あやまってもゆるしてくれないかな?と心配する気持ちがあると思います。自分も話をしていたから、謝らないとこぼしてしまつた人に悪いので、ぼくは、「大丈夫だよ。次からは気を付けてね。」って言うと思います。

L 児 ぼくは、こぼしちゃつた相手に自分が言葉をかけるんだつたら、いつもはやつた側の気持ちは考えずにカッとなつてしまつているから、相手の気持ちを考へて「大丈夫、急いでいてもこれから気を付けてね。今日はしょうがないね。」と励ましてあげます。

M 児 今日の明(主人公)のように給食時間に待ちながら話をしていた自分も悪かつたなと思います。相手には、これからは気を付けてねと声をかけます。

#### ④短期のパフォーマンス課題からの「学習状況の把握」

パフォーマンス課題に対する「発言での発表」から、2つの視点「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」に沿つて以下の【表5】のように児童の学習状況を把握した。

【表5 実践2のパフォーマンス評価】

	パフォーマンス課題に対する発言	学習状況の把握
J 児	こぼした相手は、多分、 <u>申し訳ないなって気持ち</u> だと思います。でも、 <u>自分は、大事な服じゃなくても、やっぱり嫌な気持ち</u> になったし。(相手は) <u>間違つて不安でいっぱいだし、自分のことをすごく責めた</u> と思います。だから、大丈夫って声をかけます。	→ <u>視点1-①道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠</u> やそのときの心情を様々な視点から捉え考へようとしている ・立場を変え、相手の立場から心情を捉えようとしている。その上で、自分ならどんな気持ちになるかを自分の経験を基にして考へている。お互いの気持ちを考へた上で、自分を取りうる行動を考へようとしている。
K 児	その当番の人は、こぼしてしまって、あやまってもゆるしてくれないかな?と心配する気持ちがあると思います。 <u>自分も話をしていたから、謝らないとこぼしてしまつた人に悪いので、ぼくは「大丈夫だよ。次からは気を付けてね。」</u> って言うと思います。	→ <u>視点1-①道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠</u> やそのときの心情を様々な視点から捉え考へようとしている ・J 児同様に、相手の立場から心情を捉へることからスタートしている。その時の自分の状況にも目を向けて考へている。
L 児	ぼくは、こぼしちゃつた相手に自分が言葉をかけるんだつたら、いつもはや	→ <u>視点1-①道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠</u> やそのときの心情を様々な視点から捉

	った側の気持ちは考えずにカッとな ってしまっているから、相手の気持ち を考えて「大丈夫、急いでいてもこれ から気を付けてね。今日はしょうがな いね。」と励ましてあげます。	え考えようとしている ・「いつもはやった側の気持ちを考えずに」とい う発言。自分ではなく、相手の立場になって心 情を捉えようとしている。 → <b>視点2-②</b> 現在の自分自身を振り返り、自らの行 動や考えを見直している ・パフォーマンス課題に対して、これまでの自分 の経験と重ね合わせながら考えている。
M 児	今日の明（主人公）のように、給食時 間に待ちながら話をしていた自分も 悪かったなと思います。相手には、「こ れからは気を付けてね。」と声をかけ ます。	→ <b>視点2-①</b> 読み物教材の登場人物を自分に置き 換えて考え、自分なりに具体的にイメージして 理解しようとしている ・教材の主人公と重ね合わせ、学んだ価値理解を 基に考えようとしている。

### ⑤実践2 についての考察

#### a. 評価の視点からの考察

本時の学びが、パフォーマンス課題に対する発言にどのように表れているのかを考察した。【表5】に示した発言のようにJ児やK児は、まず相手がどんな気持ちでいるのかについて発言している。自分を取り得る行動の前に、相手の立場になって心情を把握しようとしていることが分かる。また、K児は、導入時にパフォーマンス課題を提示した時には、「まず、給食は大丈夫かなと考えます。その後、服が汚れてしまったなあ。がっかりします」と、自分の気持ちを中心に考えていた。しかし、後半にパフォーマンス課題を提示した時には、相手の気持ちを先に考えようとしている。これは、本時の学びを通して「相手の立場を受け入れる」ことの大切さを感じ取り、その価値理解を基にした発言と捉えることができる。L児は、「いつもはやった側の気持ちは考えずにカッとなってしまうから」と、これまでの自分の経験と重ねながら考えている。M児は、「今日の明（主人公）のように」と前置きしながら発言している。教材の主人公に自分を重ね、学び取った価値理解を基にしながら、考えていることが分かる。

#### b. 授業の視点からの考察

場面2では、パフォーマンス課題を再度提示し、児童に発言を求めた。前回の「心と心のあく手」の授業と、共通するのは「自分の経験」や「教材での学び」を基に考えているという点である。例えば、J児は、自分ならどんな気持ちになるかを「自分の経験」から考えている。L児の発言を見ていくと、「自分の経験」を想起することで、自分の視点だけではなく、相手側の視点も大事にして考えようとしていることが分かる。このように、児童は、現実的な状況や文脈で考えるようなパフォーマンス課題に取り組むことにより、自分の経験を想起することができ、本時の学びと自分の経験を結びつけながら考えることができたと考えられる。

### (3) 実践3 長期のパフォーマンス評価

#### ①本時の構想

4年生での「B 主として人との関わりに関すること」の6回の学習を振り返ることで、これまでの価値理解を総合しながら考えていくまとめの授業である。「様々な人と関わりながら生きていくために、どんなことを大切にしていきたいか」という視点からパフォーマンス課題を設定し、児童が人との関わりについて大切にしていきたい考えを見出していけるようにした。

教師は、本時のパフォーマンス課題への取り組み（発言や記述）だけではなく、これまでの授業の過程も含めながら見取ることで、「どのような学びのよさがみられたのか」の学習状況や、「どのような学びの成長が見られたのか」などの道徳性に係る成長の様子を評価していく。

ねらい：これまでの道徳科の学習をまとめながら、様々な人と関わりながら生きていくために、大切にしていきたいことを考える。

#### 主な学習活動

- 1 本時の内容について確認する。  
パフォーマンス課題を提示し、問題を把握する。
- 2 これまでの「主として人との関わりに関すること」についての授業を振り返る。  
話し合いを通して、自分の考えを模索していく。・・・場面1
- 3 これからの関わりについて、自分の考えをまとめる。  
長期のパフォーマンス課題に取り組み、自分の考えをまとめる。・・・場面2

#### ②パフォーマンス課題の設定

「人との関わり」を考える際に、どこに視点を置くかは児童によって様々であると考えた。大切にしたい関わりを親切から考える場合もあれば、礼儀から考える場合もある。または、全体を通して考える場合もあれば、関連する価値から考える場合もあるだろう。そこで、児童一人ひとりが自分なりの視点から考えることができるように、具体的な場面設定を行わず、これまでの学びを総合して考えるような課題を設定した。パフォーマンス課題は以下の通りである。

#### パフォーマンス課題

道徳の学習では、人との関わりについて、親切や友情、あいさつなど、たくさんのことを学んできました。これから、みなさんは高学年になり、様々な人との関わりが増えてきます。そこで、様々な人と関わりながら生きていくために大切なことを、学習を振り返りながら考えてみましょう。まとめるときには、次の内容が含まれるようにします。

- (1) 人との関わりでどんなことを大切にしていきたいか。
- (2) なぜ大切にしたいと考えたのか。

#### ③パフォーマンス課題の実際

上記①の構想にある場面1から場面2に至るまでの児童の様子である。場面1では、これまでの教材の学びをこれまでの板書やワークシートを基に振り返りながら、パフォーマンス課題について話し合う時間を取った。場面2では、課題に対する自分の考えをじっくりと記述する時間を取った。

(授業記録) 場面1から場面2まで

- T ※パフォーマンス課題を提示する。
- C1 今まで親切は行動や言葉で表すものだと思っていました。でも、心で行う親切もできると知りました。心で伝えることが大切だと思います。
- T 言葉や行動にも、その心が表れるかもしれませんね。
- C2 相手のしたことだけを責めないで、自分も悪いところがなかったか見返すようにしたいと思いました。
- T いいところはいいけど、自分の悪いところって見つめるのは嫌じゃないですか。
- C3 できなかったところを見つめ直すことで、「できるようになろう」と努力することができると思います。
- C4 自分の苦手なところを知って、これから積極的に直していけると思います。
- T そういういいこともあるんですね。
- C5 私は、今まで少しほめてもらいたいと思って親切をしてきました。相手が嬉しく、自分も笑顔になれるような親切をしていきたいです。
- C6 大切な物を壊されたりしても、本当に相手だけが悪いのかを考えていきたいです。
- C7 親切をして断られても繰り返しやることで自分にも相手にもいいことがあるので、ぼくは何でも続けることが大事だと思いました。
- T 勉強しながら、たくさんの大事な心を学びましたね。
- C8 相手の気持ちをしっかりと考えることや冷静な判断が必要だと思いました。
- C9 相手の気持ちを考えることが大切なんだなと思いました。相手がわざとやったわけではない場合はどうしてそうなったかを考えることが大事。でも、わざとやったならばしっかり注意することが大切だと思います。
- C10 私は、相手のことを理解するということが大切だと思います。いじめをなくすことにもつながると思います。
- T 色々な考えが出てきました。では、自分の考えをワークシートにまとめてみましょう。
- C ワークシートに記述する。

#### ④長期のパフォーマンス課題からの「学習状況の把握」や「道徳性に係る成長の様子」の把握

長期のパフォーマンス評価は、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握するものである。そのために、これまでの授業の記述や発言を資料とし、その学習の過程に目を向けながら評価を行った。

今回の評価については、学級担任2人とモデレーション（調整）を行った。モデレーションとは、複数の評価者で、互いの見方を照らし合わせながら、評価を確認していき、評価の一貫性を確保していく調整作業である（西野・鈴木・貝塚，2017）。複数の目で捉え、評価について話し合うことで、信頼性・妥当性を高めていくことが重要であり、そのための作業である。

【表6】には、抽出児童1について、道徳科の学習を積み重ねたことによる「道徳性に係る成長の様子」の評価を示している。抽出児童1は、6月の授業では「親切を断られると残念な気持ちになる」と、自分よりの記述をしていたが、どのように考えが変容しているのかを見取りたいと考え、抽出した。【表7】には、道徳科の学習全体を通して見られた児童のよさとしての「学習状況」を示している。抽出児童2は、6月の授業で、友達の発言を受けながら、自分なりの見解を述べるよさが見られた。そのようなよさが、その後の授業ではどのように表れているのかを見取りたいと考え、抽出した。

【表6 抽出児童1 学習過程から捉えた「道徳性に係る成長の様子」】

		発言や記述	道徳性に係る成長の様子の把握	
5月	発言	<p><u>どんなあいさつを大切にしたいか。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・えしゃくをすることに気を付けています。食べる時には、感謝して「いただきます」や「ごちそうさま」を言うことに気を付けています。</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつで大切にしていることは意識できているが、相手や根拠、その時の心情には意識が向いていない。</li> </ul>	
6月	記述	<p><u>どんな親切を大切にしていきたいか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の気持ちを考えないと、断られて残念な気持ちになります。相手の立場に立って、気持ちを考えた親切を大切にしていきたいです。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の立場に立った親切を大切にしていきたいと考えている。その時の心情についてもふれている。断られると残念だという考えをもっている。</li> </ul>
10月	発言	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私も、～さんと似ていて相手を許すには、相手の失敗を受け止めることが大切だと思います。相手のことを認めないと自分のことばかり考えてしまって、明のようになってしまうからです。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達の発言を受けながら、価値理解を深め、自分の考えを述べている。</li> </ul>
	記述	<p><u>どんな関わりを大切にしていきたいか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「相手のことを理解する」ことが大切だと思いました。間違いや失敗を一方的に責めてしまったり、自分と違う相手の心を認めなかったりするから。「相手を理解すること」は、いじめをなくすことにもつながります。特に、「人の失敗を笑わない」ということ。これからは、このことに気を付けて生活したいです。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分なりに「人の失敗を笑わない」という、これからの生き方の課題を見出している。「いじめをなくすことにもつながる」と、理解した価値に広がりをもたせて考えている。</li> </ul>	
まとめ	記述	<p><u>長期のパフォーマンス課題への記述</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道徳の学習では、特に「相手の立場になって考える」ということを学びました。算数の時間には、問題が分からなくて困っている人がいた時に、もう少しできそうだったので、すぐに教えるのではなく、「相手の立場に立って見守る」親切をすることができました。これらを続けていくためには、いろんな考えが出たけど、やっぱり「相手の立場に立って考える」ということを私は大切にしていきたいです。お互いが相手の立場になって考えることができれば、自分にとっても、相手にとっても気持ちのよい生活ができるからです。</li> </ul>	<p><b>視点2-②</b>現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の経験を想起し、「・・・親切をすることができた」と、実感を伴って理解できるようになった。道徳科の学びと自分の経験をつなげながら考えている。</li> </ul> <p><b>視点2-③</b>道徳的な問題に対して自己の取りうる行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達の意見やこれまでの学びを総合し、自分が大切にしていきたいことを再構築している。相手の立場に立って考えることが、お互いが気持ちよく生活できることにつながると自分なりの理解を深めている。</li> </ul>	

【表7 抽出児童2 道徳の学習全体を通して捉えた児童のよさとしての「学習状況」】

		発言や記述	児童のよさとしての学習状況の把握
6月	発言	(前の児童の発言を受けて) ・付け足しがあります。私は、おばあさんは自分が練習したいことを考えながらも、主人公のことを優しい子だなあと感じたと思います。	<b>視点1-②</b> 自分とは違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている ・友達の発言と自分の考えを比較し、付け足しをしながら自分なりの見解を述べている。
10月	発言	・いつも手入りを欠かさないで大切な物を失ってしまったから、簡単ではなかった。 (何人が続く友達の話に頷きながら聞いている。) (さらに、友達の発言を受けてから) ・明が自分が悪いことをしたことを、分かって、もう明がお父さんの大切な物を勝手に使わないことを分かったからだと思います。	<b>視点1-②</b> 自分とは違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている ・友達の発言を頷きながら理解し、その発言と自分の発言を比較し、次の自身の発言につなげている。 <b>視点2-③</b> 道徳的な問題に対して自己の取りうる行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解をさらに深めている ・発言した後、複数の友達の発言を受けながら、さらに発言している。友達の発言を聞くことで、「広い心をもつとはどういうことなのか」について、理解を深めている。
まとめ	記述	<b>長期のパフォーマンス課題への記述</b> ・私は、道徳の学習を通して、自分もみんなが話していたように、気持ちを考えて行動することが大切だと分かりました。「心と心のあく手」をやるまでは、「やってあげる」行動だけが親切だと思っていたけど、相手の気持ちに合わせて行う親切も大切だと思いました。 もし相手に何かをされた時でも、相手の気持ちを考え、分かってあげることが大切だと思います。	<b>視点2-③</b> 道徳的な問題に対して自己の取りうる行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解をさらに深めている ・複数の友達の考えを総合して考えている。友達の考えに触れることで、価値理解を深めている。自分の考えの変容を自覚しながら考えている。 <b>視点1-①</b> 道徳的価値に関わる問題に対して、判断の根拠やその時の心情を様々な視点から考えている ・これまでの学習を振り返ることで、視点から自分から相手に置き、親切に対する考え方が変わったことを自覚している。

⑤実践3についての考察

評価の視点から

まずは、抽出児童1【表6】について「道徳性に係る成長の様子」を次のように把握した。一つは、自分の経験や道徳科の学びをつなげながら、自己を見つめることができるようになったことである。この児童は、6月の授業時には、価値について大切なことは考えているものの、自分の行動や考えについて見つめるところまでは至っていなかった。10月の授業では、価値理解だけでなく、「相手を理解することは、いじめをなくすことにもつながる」と、自分の生活においてどんな意味をもつのかについて考えている。さらに、自分の課題を捉えるようになった。まとめの授業では、自分が実生活で実現できた「見守る親切」を振り返ることで、その大切さを実感することができている。学習の過程を経て、自己を見つめながら考えるようになってきている。これは、視点2-②「現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している」ことへの成長の様子と

捉えることができる。もう一つは、友達の考えを聞き、受け止める中で、価値理解を深めることができるようになったことである。この児童は、10月の授業やまとめの授業で、相手の考えを受けてから発言する姿が見られるようになってきた。まとめの授業の記述では、友達の考えを受けて、「やっぱり」と自分の考えを再構築していることも分かる。これは、視点2-③「道徳的な問題に対して自己の取りうる行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている」ことへの成長と捉えることができる。

次に、抽出児童2【表7】についてである。この児童は、学習全体を通して、友達の発言を受けて、それらを自分の考えと比較したり、友達の考えから価値の理解を深めたりしているよさが見られた。この児童は、友達が発言するときには相手の方に体を向け、相手の目を見て、頷きながら話を聞く姿勢をもっている。6月と10月の授業では、相手の発言に付け足しをしたり、考えを比較してさらに発言したりする姿が見られた。まとめの授業では、複数の友達の考えを受け止め、その考えを総合しながら自分なりに大切にしていきたいことをまとめている。道徳科の学習全体を通して見られたよさであった。【表7】を見ると、視点1-②や視点2-③の姿が複数表出している。これらは、視点1-②「自分とは違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている」や、視点2-③「道徳的な問題に対して自己の取りうる行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解をさらに深めている」についての児童のよさと捉えることができる。

このように、パフォーマンス課題に取り組むことによって、学習状況や、道徳性に係る成長の様子を表出し、評価することが可能となる。

## 6 研究のまとめ

### (1) 評価の視点から

#### ①「学習状況」や「道徳性に係る成長の様子」を把握することができるパフォーマンス評価

短期のパフォーマンス評価では、児童の現実に起こりうるような架空の状況設定をしたパフォーマンス課題を与えることで、評価の視点で学びの姿を表出し、把握することができた。ただ、授業中の発言で見取る場合は、把握できる児童に限られてくるため、意図的・計画的な見取りが必要であることも明らかになった。また、一つの授業を全ての視点で見取るのではなく、「今日の授業はこの視点で児童を見取る」と、評価の視点を一つか二つ決めてから授業を行う方法もあると感じた。

長期のパフォーマンス評価では、児童がパフォーマンス課題に取り組むことで、これまでの価値理解を総合し、自分の考えを構築する過程において、児童が「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展している」姿や、「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めている」姿を表出し、把握することができた。これまでの授業の記述や発言と比較することで、学びの過程をたどりながら、児童一人ひとりにどんなよさがあり、どんな成長が見られたのかについても把握することができた。そのためには、記録を残すということも必要である。

#### ②複数の教師による評価

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編「第5章 道徳科の評価 第2節道徳科における児童の学習状況及び成長の様子についての評価」には、評価の信頼性、妥当性を担保するために、

個々の教師が個人として行うのではなく、学校として組織的・計画的に行われることの重要性が指摘されている。本研究でも、学級担任と、児童の「よさ」や「成長の様子」について話し合う機会をもち、それぞれの解釈を出し合った。評価の検討をし、授業者と学級担任の評価をつなげたものを前出の【表6】【表7】に一例として示した。以下は抽出児童の担任による評価である。

#### 抽出児童1についての担任からの評価

6月の道徳科の授業以来、いろんな立場の意見を受け止めて、自分の課題を見つめたり、自分の考えを見出したりすることができるようになった。児童が、迷いながらも、自分が正しいと思った意見を述べることができるようになったことが、道徳科を通して見られた成長である。以前は、中々自分の思いを口にできないこともあった、しかし、答えが一つではない道徳科の授業の中で、友達と考えを深めていく中で「自分の考えも正しいんだ。」と道徳科の授業が背中を押してくれた。

#### 抽出児童2についての担任からの評価

友達の考えを総合して、自分の考えを見出すことができるようになったことは、道徳科ならではの成長である。道徳科の授業を通して、他の児童と考えが違って、自分の考えを話そうとする意欲が見られるようになった。【表7】の記述にあるように「自分もみんなが話していたように」と考えを深められたのは、たくさんの考えに触れる道徳科の授業が効果的に働いているからだと感じた。

上記の抽出児童1についての担任からの評価は、【表6】にある視点2-②、視点2-③の「道徳性に係る成長」として評価につなげている。上記の抽出児童2についての担任からの評価は【表7】にある視点1-②、視点2-③の「学びのよさ」として評価につなげている。

両者からは「発言や記述には表れない児童の姿を見取ることができた」と感想を頂いた。担任が、自分の学級を客観的に見ることで「発言はしていなくても友達の考えを頷きながら聞いている姿」や、「記述はできなくても、その子なりに一生懸命考えようとしている姿」を見取ることができたようである。このように、複数の目で見えていくことで、児童の色々な姿が見えてくる。複数の目で見取ることが、児童のより深い見取りにつながると感じた。

## (2) 授業の視点から

### ①自分の考えを構築し、深めることができるパフォーマンス課題

実践1の考察でも述べたように、児童は、現実的な状況や文脈で考えるような短期のパフォーマンス課題に取り組むことにより、自分の生活場面につなげ、経験を想起しながら考えることができた。さらに想起された経験と、本時の学びを通して、自分の考えを構築することができた。まとめの授業では、長期のパフォーマンス課題を通して、自己の成長を感じたり、自分の課題を捉えたりする児童の姿が見られた。多数の児童が、「今までは、～だったけど」や「やっぱり・・・」と、これまでの自分の学びと比較して考えたり、「あの時はできなかったけど、今では・・・」と、課題や成長を捉えたりしている。これは、これまでの学習を通して形成された道徳的価値観を基盤として、自己の生き方への考えを深めている姿であると言える。その一方、年間の限られた授業の中で、このようなまとめの授業をどのように位置づけていくかは検討していかなければならない。

### ②自己の成長を実感したり、課題を捉えたりすることができるパフォーマンス課題

道徳科で見取っていくのは、「道徳科での学びの成長の様子」であるが、パフォーマンス課題を

通して、「道徳性の成長」を実感することにもつながったと考えられる。例えば、前出の抽出児童1は、まとめの授業を行うことで、自分が実際に行ってきた親切を振り返っている。以前はできなかった親切が、今ではできるようになったことを振り返り、自己の成長を実感できている。他にも「最初は、あいさつはただ人に言うだけだと思っていたけど、心のこもったあいさつは、ぼくから見て友達を増やしたり、友だちを元気にさせたりすることができました。」と、その意義を見出している児童もいた。さらに、「相手をずっと責めていたので、直したいです。そのために、広い心、優しい心を持ちたいです。」などと、自分の課題を捉えている児童もいた。成長を感じることも、課題を捉えることも、「自分自身の問題として捉え、向き合う道徳」につながっていく大切なことである。教科としての道徳と、学校全体で行う道徳教育をいかに結びつけていくかも今後の課題であると言える。

### ③「主として人との関わりに関すること」の学びについて

この「主として人との関わりに関すること」について、まとめの授業での児童の記述を考察していくと見えてきたことがある。それは、「人との関わりに自分を位置づけること」である。授業を積み重ねていくと、児童の記述には、「相手」や「人」のキーワードが見られるようになってきた。これは、人との関わりにおいて、「相手」を意識して考えよう、行動しようという意識の表れだと考えられる。ところが、まとめの授業の記述では、「相手」や「人」の他に、「自分」というキーワードを挙げる児童が見られるようになった。この「自分」という言葉に注目すると、文章内でもとつかわれているのが「相手」という言葉である。

この「自分」と「相手」の言葉がつかわれている児童の記述を抜粋して載せたものが【表8】である。自分と相手をつなぎ合わせて考えていることが分かる。相手のことを考えるためには、そこに自分をどう位置づけていくかが大事であると考えているのだ。人との関わりにおいて、相手の気持ちを押し量ったり、寄り添ったりすることは大切なことである。しかし、双方の存在があってこそその「人との関わり」である。学びを通し、人との関わりに自分を位置づけ、自己の存在を認識していったと考えられる。

【表8 児童が記述した「自分」と「相手」に関わる記述】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・学んだのは、自分がその行動をすれば、相手の気持ちはどうなるのかを考えてから行動することです。そのことから、大切だと思ったことは、自分の失敗した時のことを振り返って、<b>その時の自分の気持ちと相手の気持ちを重ねる</b>ということです。</li> <li>・私は、「心で伝える」ということを大切にしていきたいです。理由は、「温かい言葉」のように断られても<b>相手にとっても、自分にとっても</b>よりよいものにつながると思うからです。</li> <li>・私は、友達などと学習や行動を共にしながら、<b>相手のことも自分のことも</b>よりよくできると 思います。わけは、前に道徳でもやった「思いがけないあいさつ」では、主人公が心のこもったあいさつを見て、相手の気持ちを考えてあいさつするようになったからです。</li> <li>・ぼくは、やっぱり<b>自分と相手の気持ちは違うので、つなぎ合わせて</b>生活していきたいと思いました。なぜかという、自分の経験の中でも相手と同じような気持ちになったこともあると思うから、その時のことを積み重ねながら相手の気持ちとつなげ合わせてよりよく生活していきたいです。</li> <li>・ぼくは、<b>お互いがよりよくなっているからこそ、よりよい生き方につながるのだ</b>と思います。今までは、自分だけが中心になっていたけれど、「心と心のあく手」を読んで、相手の気持ちを考えることは本当に大切でこれからはつながると思いました。気持ちよい関係づくりにつながる大切なことは、「<b>自分と相手</b>」ということだと思いました。</li> </ul>
---

#### ④評価をどのように授業改善に生かしていくか

評価の目的は、児童にとっては、自らの成長を実感し意欲の向上につなげていくものであるが、教師にとっては、指導の目標や指導方法の改善に取り組むための資料としていくものである。例えば、6月の実践では、児童が記述した感想を評価していると、表面的な価値理解に終わっている児童が多数見られた。この改善として取り入れたのが、パフォーマンス課題であった。また、児童の発言を評価していると、反応が鈍かった児童や考えが深まっていない児童がいたことにも気付いた。これについては、発問の吟味と精選を行った。このように、児童の姿から見えてきたことから、再度自身の指導を見直し、授業の改善につなげることができた。実践協力校の教員からは、随時授業についての評価を頂いた。考える必然性のある発問や、児童の課題意識に基づいた授業展開、価値を明らかにする教材分析などについて指摘を頂いた。指摘を頂くことで、これまで見えなかった自分の指導の課題点が明らかになっていった。このように、他の教師から授業についての評価を得ることも、授業を改善していく上で重要なことである。

#### 7. 引用・参考文献

- ・赤堀博行『「特別の教科 道徳」で大切なこと』, 東洋館出版社, 2017年, pp.201-219
- ・ダイアン・ハート『パフォーマンス評価入門ー「真正の評価」論からの提案』, 田中耕治監訳, ミネルヴァ書房, 2012年
- ・田中耕治『よく分かる教育評価』, ミネルヴァ書房, 2010年
- ・田沼茂紀『指導と評価の一体化を実現する道徳科カリキュラム・マネジメント』, 学事出版, 2017年
- ・永田繁雄『「道徳科」評価の考え方・進め方』, 教育開発研究所, 2017年, pp.40-43
- ・西岡加名恵・田中耕治『「活用する力」を育てる授業と評価 中学校・パフォーマンス課題とルーブリックの提案』, 学事出版, 2009年
- ・西岡加名恵・石井 英真・田中 耕治『新しい教育評価入門 一人を育てる評価のために 一』, 有斐閣, 2015年, pp.15-158
- ・西岡加名恵『資質・能力を育てるパフォーマンス評価』, 明治図書, 2016年, pp.50-83
- ・西岡加名恵・石井英真『見方・考え方を育てるパフォーマンス評価』, 明治図書, 2018年
- ・西野真由美・鈴木明雄・貝塚茂樹『「考え、議論する道徳」の指導法と評価』, 教育出版, 2017年
- ・松本美奈・貝塚茂樹・西野真由美・合田哲雄『編特別の教科道徳 Q&A』, ミネルヴァ書房, 2016年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領』, 2017年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』, 2018年
- ・中央審議会答申『道徳に係る教育課程の改善等について』, 2014年  
URL:[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890_1.pdf) (2018.11.23 閲覧)
- ・中央教育審議会教育課程部会『道徳教育・道徳科を通じて育成すべき資質・能力について』, 2016年 URL:[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/078/siryo](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/078/siryo) (2018.11.23 閲覧)
- ・『「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について (報告)』, 文部科学省, 2016年  
URL:[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/111/houkoku/1375479.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/111/houkoku/1375479.htm) (2018.12.25 閲覧)
- ・大分県教育委員会『道徳教育指導資料「道徳科」評価と授業構想の在り方』, 2018年  
URL:<http://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/2020310.pdf> (2019.1.7 閲覧)

岩手大学大学院教育学研究科（平成29年度入学）

濱田 成樹

所属プログラム

授業力開発プログラム

担当教員 岩手大学大学院教育学研究科

准教授 室井 麗子

特命教授 多田 英史